

スタジオ夜話

第 100 話 スタジオ夜話

「音へのかかわり方」

☆ はじめに

スタジオ夜話、読者皆様のお蔭をもちまして第 100 話を迎えることができました。編集長のアドバイスや挿入イラストにも随分と助けられました。第 1 話は 2013 年 4 月ですから足かけ 8 年目を迎えたわけです。本誌連載の諸先輩方に比べるとまだまだ未熟ですが今後ともよろしく願いいたします。

さてスタジオ夜話ですがもともと音コンテンツにかかわる様々なお話を若干制作技術的な側面も含めて進めてきました。折に触れてその背景にある考え方など、多少理屈っぽいお話もしました。時には全く関係の無いお話もありました。そんな紆余曲折を経ての今回です。今後はもう少し音寄りに展開したいと思っています。話は 100 話ということなのですが過去を調べて見ると実は 5 話は 3 回に分けていました。8 話はどうも無かったようです。つまり計算すると今回は 101 話なのです。筆者の勘違いからお話冒頭のタイトルの回数記載を間違っていました。申し訳ございません。スタジオ夜話 100 話を超え新たな気持ちでお話を続けます。繰り返しになりますが引き続き宜しくお願い致します。

☆ 「音へのかかわり方」

スタジオ夜話的に・・・Ⅰ

一言で「音へのかかわり方」と言いますが実は状況によってそれは様々です。100 話を機にあらためてそのかかわり方を確認してみたいと思います。例えば音楽コンテンツ一つ取っても録音、マスタリング、提供媒体の違いなどによってそのかかわり方は様々です。また音響機器メーカーとしての音へのかかわり方、放送局は・・・筆者のように直接的で無い外野的？なかかわり方をしている方もいます。スタジオ夜話はそ

うした様々なかかわり方をしている方々のお話を参考に筆者の経験や思いの中でお話をまとめ展開しています。さらにスタジオ夜話的に面白おかしく、創意工夫を大切にとの思いです。

スタジオ夜話的な音へのかかわり方ですが以前本誌でプロオーディオ、プロとしてのかかわり方についてお話をしました。

ではあらためてアマチュアオーディオ？ってというお話です。筆者は音へのかかわり方は音商品へのかかわり方、制作提供側と受ける側の違いはありますがコンテンツ内容にかかわる部分ではプロもアマチュアもありません。「ドボルザーク新世界」小澤征爾 指揮、ウィーン・フィルにはプロが聴こうとアマが聴こうと本質的違いはありません。TV 番組で大手コンビニがお偉い？料理人のあーだのこーだのを聞き一喜一憂する番組があります。所詮 TV 番組ですがプロと呼ばれるお偉い？料理人、自分の店だけにしています。音の世界にも同じ傾向が多々あります。私たちはプロ、アマを問わずコンテンツをそれぞれが楽しむという前提でかかわっていることを忘れてはいけません。スタジオ夜話ではスタジオ機器ではありませんが、古いマッキンのアンプやサンスイの製品も話題にします。趣味のオーディオ大歓迎です。お偉い？音の料理人の意識改革に努力もしてみたいとあらためて思います。筆者は本誌で色々とお話していますが決してお偉くはありません。どうぞ批評なり批判をお寄せください。

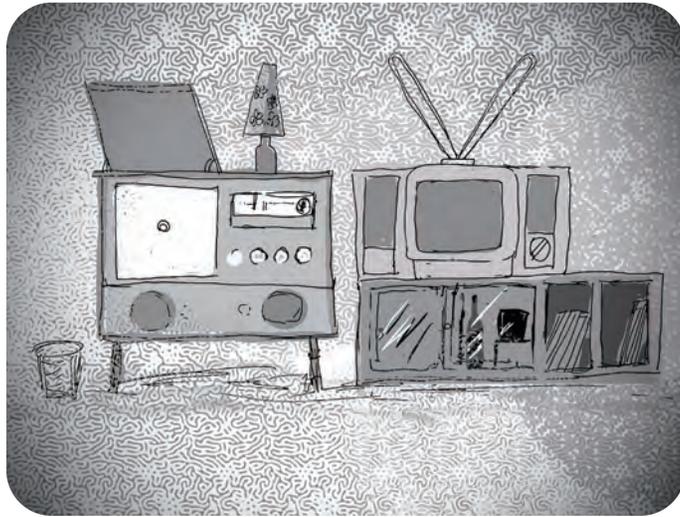
☆ 「音へのかかわり方」

スタジオ夜話的に・・・Ⅱ

趣味のオーディオのお話ができました。昨今 LP レコードも人気になっています。かつてのオーディオマニア大喜びです。筆者が最近始めたことがあります。趣味のオーディオ的なことです。最先端のスタジオで

業務にたずさわる方々にもお勧めです。それは古いオーディオ機器のレストアです。オーディオマニアの方々の中にはすでに当たり前のことですが、筆者の始めたレストアは高級機のレストアではありません。一般に普及した機器のレストアです。こんなお話をすると本誌のコンセプトと違う、趣味のオーディオ雑誌で！！と叱られるかもしれません。しかし音にかかわる本質はこうしたことに触れることによっても理解が深まるものなのです。

では・・・読者皆様はセパレートステレオというオーディオ機器をご存じでしょうか？ご年配の諸氏をご存じのことと思いますが、40 代未満の方はたぶんそれって何？という感じだと想像できます。昭和 40 年代頭まで家庭でレコードを楽しむには電蓄（電気蓄音機）が使われていました。電気式ではないものは明治時代からあります。小型のものから大型のものまでありました。（電蓄の博物館が以前現オーディオテクニカ社にありました。その後福井県立こども歴史文化館に寄贈され現在展示されています。日本有数の展示物となっています。）昭和 30 年代に入ると一体型の電蓄が普及しました。もちろんステレオ LP 再生ができチューナも装備していました。その中でも面白いのは FM 放送はまだモノラル時代でなんと、AM 2 局で右左のステレオ放送をしている時期がありチューナ部分を 2 台実装している一体型電蓄ものもありました。その後ステレオレコード音源の発売が増え高音質（ハイファイと言った）、FM 放送もステレオ化が進みアンプ、チューナ部とプレー部を一体化し、加えてスピーカ部をセパレートした 3 パートオーディオ機器セパレートステレオが出現しました。その後全ての機器を気に入ったメーカーで揃えるというコンセプトで各メーカーがコンポーネントステレオというスタイルに変化し、し



昭和 40 年代。玄関を入るとすぐ脇に部屋があり、訪問者はそこへ通される、応接間と呼ばれていた部屋があった。家具調のセパレートステレオやテレビなどが、ホームバーキャビネットと並んで鎮座していた。普通の家ではめったに訪問者などはないので、平日の昼間は中学生や高校生の子どもたちのたまり場でした。キャビネットの中には、当時超高級なウイスキー「ジョニ黒」が神様のように祀られていた。それを高校生の息子が吞んでしまい、中身を「カク」とか「トリス」に変えられたことも、お父さんは知りません。なにせ、超高級すぎて吞んだことがなかったからです。なんてエピソードがあちらこちらであったようです。(mo)

のぎを削って行きました。チューナは T 社、アンプは P 社スピーカは S 社といったスタイルです。今日でもこのスタイルは主流です。一方セパレートステレオは家具調と言われてお父さんの当時流行ったホームバーキャビネット（高度成長時代の家庭用お酒陳列棚）と並んで鎮座していましたがコンポステレオの普及にともないサイズのにも住スペース環境無視なのでその姿は次第に見られなくなって行きました。放送局 NHK などでは三菱 2S305 モニタースピーカ録音スタジオではアルテック 604E などが使われていた時代です。音楽を楽しむ背景にはその時代のオーディオ機器の変化も重要な要素だったのです。当時我が家にも P 社セパレートステレオがありました。筆者自宅で作ったアンプなどを居間に持ち込み聴き比べなどした記憶があります。この P 社のセットは「2SD130」のパワートランジスタのアンプ 4 台、内臓チャンネルデバイダを使いマルチ駆動してそれなりの音質を確保していました。少なくとも筆者自作のアンプよりも「良い音」であったと記憶しています。たぶん今日健在なら必要十分な音質で当時無かった CD なども楽しめると思います。そこでレストアに至る趣味

のオーディオです。音にかかわる歴史的背景、想い、そしてその音の再現、スタジオ夜話的です。

☆「音へのかかわり方」
スタジオ夜話的に・・・Ⅲ

言っではいけない本当の話、スタジオ夜話の基本的コンセプトには嘘はつかない本当のお話というものがああります。筆者はその辺のことを考慮してお話しています。以前音響家協会の公演を依頼されホール音響の現状についてお話をしました。当時ホールなどでのコンサートなどほとんどが PA 機材持ち込みでした。ステージ両サイドにスピーカーを積み上げ客席内でオペレートすることが当たり前になっていました。ホール設備の機材が役に立たないからです。ならいっそのこと持ち込みを前提に無駄な機材を購入しないのは如何？配線設備のみ十分検討してみても？持ち込み機材の設置スペースを考えてみては？と様々な提案をしました。講演会はメーカーと協会が主催です。次からは公演の依頼がピタリと無くなりました。「機材を買うな」が特に効いたようです。1mあたり数万円以上のスピーカーケーブルがあります。筆者は 1m1 000 円

ぐらいのものを使っています。正直その差がわかりません。場合によっては若干の違いがわかるかも知れませんがどちらがどうという価格差の違いを説明できる聴力は持ち合わせていません。スタジオ夜話でもこうしたスピーカーケーブルのお話をするときはカタログスペックを前提にお話しをします。ちなみに筆者は AE 線 (VVF) でも十分だと思っています。

☆ スタジオ夜話的な今後・・・

今回は 100 話ということもありスタジオ夜話の基本的なスタンスを若干のたとえとともにお話ししました。語りつくせない部分は次回以降、実際のお話に即して加えて行きます。今後は本誌編集部にて NG を出されない限りお話をスタジオ夜話的（過激）に続けて行きたいと思ひます。よろしくお願ひいたします。

次回は音の作品「サウンドドラマの今後」「なぜラジオドラマが衰退したのか」「アートとしての音」を予定しています。

— 森田 雅行 —